

そもそも端午の節句とは、五月の端（はじめ）の午（うま）の日、つまり「端午（たんご）」に由来するといわれ、災厄や疾病をはらう力があるとされた菖蒲

が咲く季節でもあり「菖蒲酒を飲んだりして、邪気とや菖蒲を門に飾つたり菖蒲くに疫病を祓う習俗がある

その一方で、民間には、五月が田植え月であることから、この日に神祭りや物忌（ものいみ）をする行事

さて、かつての青森県内でみられた端午の節句の行事としては、菖蒲や蓬での屋根葺き、菖蒲湯、畑のモ

グラを追い出す子供達の菖蒲打ちなどがあった。現在

では、男の子が生まれた家や男の子がいる家で、鯉の青森県も例外ではない。た

だし、依然として、新暦の五月ではなく月遅れの六月五日に菖蒲を玄関口に飾つたり、笹餅を作つたりする地区もある。この三月に刊行した青森県史叢書『岩木川流域の民俗』の年中行事

たことに思いを巡らせてみてはいかがだろうか。

た。また、汨羅（べきら）の淵に身を投げた屈原（くつげん）の故事にならって、古代中国では「午」と「五

が古代日本に伝来し、貴族社会にも受け入れられ、粽（ちまき）を食べた。それが古代日本に伝えられ、貴族社会にも受け入れられ、粽（ちまき）を食べた。そ

うイメージは、中世以来の武家社会で「菖蒲」を「尚武」と読みとり、とくに江戸時代に入つてから輶や武者人形を飾つて男児の健ややがて民間にも広まつたとされている。

さるが、男の子の祭りとい



板柳町での再現による菖蒲打ち
(県史編さん民俗部会・櫻庭俊美氏撮影)

端午の節句の主役は?

(県民生活文化課

県史編さんグループ 主幹)

清野耕司

キゴモリ」「女の晩」「女の家」などと呼ばれる習俗で、これを柳田国男は、田の神の奉仕者である女性達が、宵節句の一夜だけは男性を排除して特定の家にこもり、神とともに食事をする物忌の日と推測している。

端午の節句の主役は女性

もあった。例えば、五月四日の夜に、屋根に菖蒲を葺いた家に女性がこもる「フ

タカヒコモリ」「女の晩」「女の家」などと呼ばれる習俗で、これを柳田国男は、田の神の奉仕者である女性達が、宵節句の一夜だけは男性を排除して特定の家にこもり、神とともに食事をする物忌の日と推測している。

端午の節句の主役は女性

だつたとするのは性急に過

ぎるが、男の子の祭りとい

うイメージは、中世以来の

ヨモギを差した。また二尺ほどわらにショウウブとヨモギをくるんで細縄で縛り、半尺ほど残したしつばをつかんでモグラ打ちをした。」

とある。森山泰太郎著「日本の民俗 青森」によれば、南部では四日の前節句に、夕方、菖蒲・蓬を屋敷内の建物の入口にさし、その後は家の者は五日の朝食が済むまで外出できなかつたといふ。先に述べた「女の家」の習俗をうかがわせる。また、菖蒲打ちについても、津軽では子供達が田畠の畠や家の回りを打つて歩くと、稲の根つきがよくなるともグラが畠の土を掘らぬともいう。

粽や柏餅の味を思い出しながら、端午の節句は決して男の子のためだけの行事

ではなく、この季節に邪氣をはらい、女性が稲の豊作祈願に大きな役割を果たし

たことに思いを巡らせてみ